

青年期の第二分離個体化と身体醜形懸念および大学適応感の関連

南 雲 香 織*・岩 崎 眞 和**・五十嵐 透 子***

(平成29年8月31日受付；平成29年11月13日受理)

要 旨

本研究では、青年期におけるセルフ・アイデンティティの確立や精神的健康に影響を与える第二分離個体化と身体醜形懸念および大学適応感の関連を検証した。質問紙調査によって得られた大学生と専門学校生373名（男性163名、女性210名）の分析結果から、第二分離個体化が不十分な状態を表す“ひとりで居られなさ”が高いほど身体醜形懸念も高く、“不信感”“親への反発”“ひとりで居られなさ”が高いほど大学適応感が低いこと、さらに感染予防以外でマスクを着用する頻度が高いと身体醜形懸念も高いことなどが示された。最後に、横断的研究のため第二分離個体化と他の諸要因との間の因果関係については論じられないことに加え、第二分離個体化尺度（JASITA；高橋，1989）の因子構造の不安定性を考察した。

KEY WORDS

第二分離個体化 second separation-individuation process, 身体醜形懸念 body dysmorphic concern, 大学適応感 sense of adjustment for advanced education, 青年期 adolescence, マスクの着用 wearing a mask

1 問題と目的

青年期のパーソナリティ発達過程を説明する概念の1つに、Blos⁽¹⁾が命名した“第二分離個体化（second separation-individuation）”がある。Margaret Mahlerによって提唱された“分離個体化”は、母親のイメージを内在化し、母親とは異なる一人の独立した存在として自律していく乳幼児期の心理発達過程を説明する概念である⁽²⁾。Blosによれば、青年期は乳幼児期に次ぐ第二の分離個体化の時期にあたり、親からの自律願望とそれに伴う不安との間での揺れ動きと心理的葛藤を体験するなかで、親密な友人関係を構築しながら自己と友人の個別性を認識し、アイデンティティを確立していくと考えられている。Masterson⁽³⁾は、青年期の第二分離個体化が幼児期における分離個体化の達成の程度と関連しており、親からの心理的自律が不十分あるいは困難な状態であるほど、家庭内暴力や学校不適応、摂食障害、さまざまなパーソナリティ障害などがみられやすいことを報告している。このため、青年期の精神的健康を増進したり、心理的自律を促進するための臨床心理学的援助を行う上で、彼らの第二分離個体化に焦点を当てた研究は有益な知見をもたらすと考えられる。

日本で第二分離個体化に焦点化した量的研究として、Separation-Individuation Test of Adolescence（以下、SITAと略記）⁽⁴⁾の邦訳版（JASITA）を作成し、小学6年生から大学4年生までの分離個体化の発達過程を検証した高橋⁽⁵⁾の研究が挙げられる。高橋は、中学2年生頃より分離個体化にむけた心理的变化や自我の退行などがみられ、大学入学以降徐々に分離個体化が達成され始めることを明らかにした。また井上・佐々木⁽⁶⁾は、大学生を対象に分離個体化と自我同一性形成との関連を検証し、青年期の心理的な課題への支援として分離個体化の促進が1つの有益な手立てとなることを論じている。伊藤・丸島⁽⁷⁾も、青年期における両親からの受容的なかわりと一体感のある家庭環境のなかで第二分離個体化が達成されているほど、不安が低く情緒的に安定していることを報告している。しかし1990年代前半より、青年期における親密な友人関係の構築を避ける傾向⁽⁸⁾や特に女性で母娘間の心理的距離が近い“一卵性双生児現象”⁽⁹⁾などが指摘されており、親密な友人関係を構築する中で進展する分離個体化へのネガティブな影響が推測されるが、現代青年の分離個体化に着目した研究の蓄積は未だ十分とはいえない。

こうした現代青年の第二分離個体化の状態との関連が推測される要因の1つに、思春期以降に高まりやすいとされる“身体醜形懸念”がある。身体醜形懸念は“容姿についての欠陥への過剰な心配や強いとらわれ、過度の確認行動や容姿についての欠陥をカムフラージュするための行動と、社会的な場面からの回避や安全を求める行動”（Littleton et al., 2005, p.229）⁽¹⁰⁾と定義されており、“身体醜形障害（body dysmorphic disorder）”の症状がみられな

がらも、日常生活での支障がほとんどみられないか、あっても軽微で潜在的な状態を表している。高校生を対象に身体醜形懸念と自己像のあり方との関連を検討した横打⁽¹¹⁾は、男女ともに“現実自己”と“理想自己”とが不一致な状態であるほど“容姿への否定的評価”が高いことを報告している。これは、自己の受容や確立が不十分で自己像が不安定であることによって、容姿の受容も困難になりやすく身体醜形懸念も高まりやすいことを示唆している。近年、大学生のなかに軽度ではあるが身体醜形障害の諸症状が認められるという報告⁽¹²⁾もあり、自己の確立過程で依存と自律の葛藤を抱きやすい青年期においても、分離個体化の達成状態と身体醜形懸念に関連がみられると考えられる。

さらに、第二分離個体化の状態と精神的健康や適応状態との関連についての理解を深めるため、“個人-環境の適合性”の視点から学生生活全般に対して抱く主観的な感情体験や適応状態を表す“大学適応感”⁽¹³⁾に着目した。Glenn & Grayson⁽¹⁴⁾は、第二分離個体化と学校適応感および自尊感情との間にそれぞれ中程度の正の関連が示されたことを報告している。この結果は、青年期における分離個体化の達成に伴って自己の確立がなされているほど、自尊感情や学校生活への適応が高まり、精神的健康も保たれやすいことを示唆していると思われるが、日本では第二分離個体化の達成状態と主要な社会生活での適応状態との関連を検討した研究は報告されていない。本研究では、第二分離個体化と身体醜形懸念および大学適応感の関連を検討し、その後の生活でのQOLへの影響が大きい青年期の精神的健康の維持増進の一助とすることを目的とする。なお、日本の文化や現代青年の傾向も踏まえ、本研究では身体醜形懸念の測定に際して感染予防以外の目的でマスクを着用する頻度について訊ね、身体醜形懸念と感染予防目的以外のマスクの着用頻度との関連も併せて検証する。

以上を踏まえた本研究の仮説1から仮説3を、以下に示す。

仮説1：感染予防目的以外のマスクの着用頻度が高い人ほど、身体醜形懸念が高い。

仮説2：第二分離個体化の達成が不十分な状態の人ほど、身体醜形懸念が高い。

仮説3：第二分離個体化の達成が不十分な状態の人ほど、主観的な適応感が低い。

2 方法

2.1 調査概要

2014年9月下旬から10月中旬にかけて、北信越地方にある国立大学法人1校と専門学校1校において倫理面で十分な配慮の上、講義終了後の集合調査形式による質問紙調査を実施した。調査協力者に対しては、本研究の目的や収集したデータが統計的に処理されるため個人情報保護されること、調査協力は自由意思でありいつでも回答を中断できることを書面と口頭により説明し、その説明の後、退室や調査協力への辞退の申し出がなかった対象に無記名式で調査を実施し、計450名から回答を得た。

2.2 分析対象

得られた回答のうち、欠損値の多さや年齢の外れ値から77名を除いた373名（有効回答率82.88%：男性163名、女性210名）を分析対象とした。分析対象の平均年齢は20.65歳（SD=1.56歳、range：18-30歳）であった。

2.3 調査材料

質問紙は、回答者の基本的属性（性別、年齢）を問う項目を記載したフェイスシートと、以下の3尺度を用いた。

(1) **第二分離個体化尺度**：高橋⁽⁵⁾により開発された尺度で、両親から自律したいという自律願望により、心理的および物理的に距離をとろうとする状態の“両親からの分離欲求”（16項目）、他者に対する依存性を否認し、両親や友人との情緒的な対人交流を拒否してひきこもっている状態の“対人交流の拒否”（8項目）、自己の能力に対する周囲からの肯定的な評価を期待し、自分自身でも過信している状態の“自惚れ”（8項目）、他者と常につながり、共に行動する関係を求め、維持したい気持ちを抱いている状態の“共生欲求”（4項目）、他者と自己の境界が認識され、心理的距離が確立されている状態の“分離個体化の達成”（7項目）、友人との親密さや親交があり、信頼関係が確立されている状態の“友人関係の確立”（5項目）、一人でいると自己の感情がコントロールできなくなり、友人とつながることを求める状態の“ひとりで居られなさ”（5項目）の7因子構造（計52項目）である。本研究では青年期を対象とするため、第二分離個体化の状態把握に適さないと考えられた“共生欲求”を除外するとともに、原版と先行研究⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽¹⁵⁾による質問項目の表現を比較検討し、最終的に計48項目（5件法）を採用した。なお、原版では1項目（「親は、私を生んだことを時々後悔しているようだ」）は2つの下位因子項目とされている。

(2) **身体醜形懸念尺度**：Littleton et al.⁽¹⁰⁾の19項目からなる自己記入式尺度を田中他⁽¹⁶⁾が邦訳した尺度で、“容姿の問

題に対する安全確保行動”（7項目），“容姿の問題からの回避行動”（6項目），“容姿への否定的評価”（6項目）の3因子構成（19項目，5件法）で，信頼性と妥当性が検証されている⁽¹⁶⁾。本研究では，日本文化や現代の青年期の傾向を踏まえ，身体醜形懸念との関連が推測される“感染予防以外の目的でのマスク着用頻度”を問う1項目（「20. 感染予防以外の目的でマスクを使用することがある」）を加えた計20項目で構成した。

(3) 大学生用適応感尺度：大久保・青柳⁽¹³⁾が作成した尺度で，“居心地の良さの感覚”（10項目），“被信頼感・受容感”（6項目），“課題・目的的存在”（7項目），“拒絶感のなさ”（6項目）の4因子構成（29項目，5件法）である。

2. 4 分析ツール

統計解析にはIBM SPSS Statistics 21を用いた。

3 結果

3. 1 第二分離個体化尺度の因子構造

第二分離個体化尺度の探索的因子分析（最尤法，Promax回転）の結果，固有値の減衰状況と解釈可能性から高橋⁽⁵⁾の報告とは異なる5因子解（累積寄与率：49.18%）を妥当と判断した。因子負荷量が.30未満であった4項目（例：「5. すごく近くに誰かがいても，私は自分らしくふるまえる」「48. 私の能力にみんなしびれていると思う」）を除外し，44項目からなる5因子構造（表1）を得た。高橋の結果および本尺度を用いた先行研究⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽¹⁵⁾を参考に，第1因子を“不信感”（ $\alpha = .84$ ），第2因子を“親への反発”（ $\alpha = .82$ ），第3因子を“自惚れ”（ $\alpha = .75$ ），第4因子を“心理的距離”（ $\alpha = .66$ ），第5因子を“ひとりで居られなさ”（ $\alpha = .70$ ）とそれぞれ命名した。なお“親への依存”については，マイナスの負荷量を示した3項目についてのみ逆転項目の得点処理を行った。

表1 第二分離個体化尺度の探索的因子分析結果（最尤法，Promax回転）

項目	F1	F2	F3	F4	F5
F1：不信感 ($\alpha = .84$)					
47 親友はとくに必要だと思わない	.74	-.05	.15	.03	-.16
10 人を心の底から信用するなんて私にはできそうにない	.69	.01	-.05	.11	.00
23 友情はそれ程大切にしないものだ	.63	.03	.03	-.16	-.05
12 いくら仲の良い友だちであっても，私が本当に困った時に助けてくれるとは限らない	.61	.06	-.02	.34	.12
24 仲の良い友だちがいると他の時間が持たなくて嫌だ	.59	.02	.14	-.06	-.01
18 私の生活は親友と呼べる友だちがいなくても充実している	.59	-.12	.15	.16	-.17
9 私にはなんでも話せて一緒にいるととても安心できる友だちがいる（※）	-.54	-.05	.13	.06	.07
22 私のことをとてもよく知っていて，私が何を考えているのか本当に分かっているような友だちがいる（※）	-.54	.00	.21	.01	.14
21 私の友だちはみんな“最高の友だち”だ（※）	-.47	-.04	.15	-.06	.02
39 誰かと親しくなると，きっと自分は傷つくと思う	.44	.11	-.10	.14	.31
30 私には他人なんて絶対に必要ない	.43	.16	.01	-.20	-.06
F2：親への反発 ($\alpha = .82$)					
31 親が邪魔で私は本当にやりたいことができない	.04	.70	.13	-.06	.08
35 私は親に自由を束縛されていると思う	-.02	.61	.05	-.01	.25
42 私は親といえる時が一番落ち着く	.13	-.60	.04	-.15	.27
14 親が私にやれということには反感をおぼえる（※）	.04	.55	.02	.14	.09
34 私は親を尊敬している	.00	-.54	.06	.11	.17
41 親は，私を本当は嫌っているんじゃないかと思うことが時々ある	.16	.49	-.10	-.17	.15
3 一人暮らしをして，親から自由になれる日が待ちどおしい	-.03	.49	.06	.01	-.06
13 親といえるよりも友だちといえる方が楽しい（※）	-.33	.48	.01	.17	-.13
29 親は，私を生んだことを時々後悔しているようだ	.23	.47	-.04	-.23	.05
4 私の親は私の考えていることを知っていて，いつも私が何を考えているのかだいたいわかっている	.02	-.41	.12	-.17	.07
44 自分の家にも私はくつろげない	.18	.38	.05	-.04	.10
25 親は私にどんな事が起ころうとも，全くおかまいなしである	.17	.38	.12	-.19	-.07
11 私の親は，私のことよりも自分のことを心配している	.09	.37	-.01	-.04	.09

F3: 自惚れ ($\alpha = .75$)

45 友だちの中で私がいつも注目の的だ	.02	.08	.72	-.13	-.07
43 私は周囲から尊敬されている	-.04	-.07	.71	.01	-.04
16 時々自分の能力と才能に私自身がびっくりしてしまう	.13	.09	.54	.12	.03
46 私はみんなからいい奴だと思われている	-.07	-.07	.53	-.02	-.08
6 友だちという時は、たいてい私がリーダーになる	-.11	.10	.51	.10	.06
1 時々なんでもできるような気がして、私にはできないことはないと思うことがある	.06	-.04	.46	.16	.07
40 他の人は、私のすることにちょっとしたことで感動する	-.04	.04	.46	-.18	.09

F4: 心理的距離 ($\alpha = .66$)

19 親しい友だちであっても、あるところでは私と意見が合うが、意見が合わないところもある	.06	-.05	-.01	.70	.03
20 友だちは友だち、私は私でお互いに好きなことをやればいいと思う	.17	-.01	.04	.61	-.03
15 友だちといつも一緒にいるのではなく、たまには一人で物事を考えたりする時間も欲しい	.18	-.12	.09	.57	.00
36 誰かと本当に親しいと思うのは、私の良いところも悪いところも両方知っていてつき合っているという場合だ	-.23	-.02	.04	.46	.16
28 親のいうことが絶対に正しいとは限らない	-.01	.24	.04	.46	-.18
26 いつまでも親を頼ってはいられないと思う	-.05	.05	-.07	.35	-.04

F5: ひとりで居られなさ ($\alpha = .70$)

2 一人していると私は怖くなってしまふ	-.12	.04	-.08	-.01	.62
38 夜寝る時、時々寂しくなって話し相手がそばにいればなあとか、そばに誰かいるだけでもいいのになあとか思うことがある	-.17	.06	.06	.13	.61
32 一人しているとふと寂しくなって友だちに電話をかけたたりすることが時々ある	-.09	-.03	.01	-.04	.59
17 一人にいる時、友だちが一緒にいないのが寂しくて友だちのことを考えてしまふ	-.20	.13	.05	-.07	.53
7 一日以上親と離れていると寂しくなる	.14	-.15	.00	-.16	.46
27 今は親友であっても、この先けんかして別れることになるんじゃないかと心配になる	.25	.13	.00	.14	.37
37 私は親といつまでも一緒に暮らしたい	.09	-.34	.03	-.08	.36

因子間相関	F1	-	.29	-.05	-.24	.17
	F2		-	.01	-.13	.02
	F3			-	-.14	.15
	F4				-	-.20

注) ※は高橋 (1989) の逆転項目を表すが、上記は逆転項目得点の処理を行わなかった場合の分析結果である。

3. 2 身体醜形懸念尺度の因子構造

項目20を除く身体醜形懸念尺度の探索的因子分析 (最尤法, Promax回転) を行ったところ、田中他⁽¹⁶⁾の3因子構造 (累積寄与率: 54.34%) が再現されたため、田中他にない第1因子を“容姿の問題に対する安全確保行動” ($\alpha = .84$)、第2因子を“容姿の問題からの回避行動” ($\alpha = .86$)、第3因子を“容姿への否定的評価” ($\alpha = .79$) とした。

3. 3 身体醜形懸念と感染予防目的以外のマスク着用頻度の関連

身体懸念醜形尺度の項目20について、「1 (まったくない)」か「2 (ほとんどない)」と回答した“マスク着用頻度低群” (202名; 54.2%)、「3 (どちらでもない)」と回答した“マスク着用頻度中群” (39名; 10.5%)、「4 (時々そうだ)」か「5 (いつもそうだ)」と回答した“マスク着用頻度高群” (132名; 35.4%) の3つに分類し、マスク着用頻度を独立変数 (3水準)、身体醜形懸念を従属変数 (3因子) とする一元配置分散分析を行ったところ、全因子で有意差がみられた ($F(2,367) = 33.38, F(2,368) = 40.96, F(2,370) = 18.86$, すべて $p < .001$) (表2)。多重比較 (LSD法) の結果、“容姿の問題に対する安全確保行動”と“容姿の問題からの回避行動”では、マスク着用頻度低群 < マスク着用頻度中群 < マスク着用頻度高群の順に有意な得点差がみられ、“容姿への否定的評価”では、“マスク着用頻度高群”の得点が他の2群に比べて有意に高かった。以上の結果から、仮説1は概ね支持された。

表2 マスク着用頻度別の身体醜形懸念因子の平均値と標準偏差

	1. マスク着用頻度低群 (n=202)		2. マスク着用頻度中群 (n=39)		3. マスク着用頻度高群 (n=132)		F値	多重比較 (LSD法)
	M	SD	M	SD	M	SD		
身体醜形懸念								
容姿の問題に対する安全確保行動	2.36	.84	2.66	.72	3.10	.78	33.37 ***	1 < 2 < 3
容姿の問題からの回避行動	1.79	.67	2.24	.74	2.60	.99	40.96 ***	1 < 2 < 3
容姿への否定的評価	3.40	.76	3.21	.68	3.84	.69	18.86 ***	1・2 < 3

*** $p < .001$

3. 4 第二分離個体化と身体醜形懸念および大学適応感の関連

複数の因子で有意な性差（表3）がみられたため、男女別に第二分離個体化と他の因子の相関分析（表4）を行った。第二分離個体化と身体醜形懸念については、若干の男女差がみられるものの“心理的距離”を除く第二分離個体化の4因子と“容姿の問題からの回避行動”に弱い正の関連がみられ、なかでも“ひとりで居られなさ”は身体醜形懸念の全因子との間でそれぞれ弱いから中程度の正の関連を示した。したがって、“心理的距離”を除き、因子間の関連の強弱に差異がみられるものの概ね仮説2を支持した。

第二分離個体化と大学適応感については、“不信感”および“親への反発”と大学適応感の全因子との間、“ひとりで居られなさ”と“課題・目的の存在”および“拒絶感の無さ”との間にそれぞれ弱いから中程度の負の関連がみられたことから、“不信感”“親への反発”“ひとりで居られなさ”の3因子については仮説3が支持された。一方、“自惚れ”は“居心地の良さの感覚”と“被信頼・受容感”との間にそれぞれ弱いから中程度の正の関連がみられ、仮説3とは異なる結果であった。

表3 各変数の性別ごとの平均値と標準偏差

items	α	範囲		全体		男性		女性		df	t		
		Min	Max	M	SD	M	SD	M	SD				
第2分離個体化													
不信感	11	.84	1.09	4.73	2.33	.62	2.47	.67	>	2.22	.56	366.00	4.01 ***
親への反発	13	.82	1.15	4.08	2.33	.54	2.41	.55	>	2.28	.53	363.00	2.30 *
自惚れ	7	.75	1.00	4.71	2.38	.61	2.42	.67		2.34	.56	366.00	1.15
心理的距離	6	.66	2.00	5.00	4.11	.48	4.09	.54		4.13	.42	370.00	.70
ひとりで居られなさ	7	.70	1.00	4.57	2.47	.67	2.29	.66	<	2.61	.64	368.00	4.68 ***
身体醜形懸念													
容姿の問題に対する安全確保行動	7	.84	1.00	5.00	2.66	.87	2.15	.78	<	3.05	.73	368.00	11.45 ***
容姿の問題からの回避行動	6	.86	1.00	5.00	2.12	.89	1.92	.85	<	2.28	.89	369.00	3.88 ***
容姿への否定的評価	6	.79	1.00	5.00	3.54	.76	3.25	.78	<	3.76	.67	371.00	6.89 ***
大学適応感													
居心地の良さの感覚	10	.88	1.20	5.00	3.43	.62	3.33	.63	<	3.50	.61	370.00	2.68 **
被信頼・受容感	6	.88	1.00	5.00	3.19	.61	3.18	.65		3.20	.58	371.00	.22
課題・目的の存在	7	.77	1.14	5.00	3.57	.63	3.63	.63		3.52	.63	368.00	1.63
拒絶感のなさ	6	.77	1.50	5.00	3.52	.64	3.47	.67		3.56	.62	369.00	1.34

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

表4 第2分離個体化と他の諸変数との相関分析結果

		身体醜形懸念			大学適応感			
		容姿の問題 に対する安全 確保行動	容姿の問題 からの回避 行動	容姿への 否定的評価	居心地の 良さの感覚	被信頼・ 受容感	課題・目的 の存在	拒絶感の 無さ
不信感	男性	.03	.15 †	.00	-.54 ***	-.45 ***	-.43 ***	-.49 ***
	女性	.10	.35 ***	.19 **	-.63 ***	-.40 ***	-.45 ***	-.51 ***
親への反発	男性	.16 *	.36 ***	.20 *	-.21 **	-.05	-.31 ***	-.27 ***
	女性	.09	.25 ***	.10	-.27 ***	-.25 ***	-.21 **	-.29 ***
自惚れ	男性	.20 *	.23 **	-.10	.33 ***	.62 ***	.15 †	.04
	女性	.04	-.10	-.29 ***	.34 ***	.53 **	.28 ***	.01
心理的距離	男性	-.14 †	-.21 **	.12	.10	.11	.16 *	.03
	女性	.07	-.05	.10	.11	.08	.10	.02
ひとりで居られなさ	男性	.49 ***	.50 ***	.23 **	-.04	.06	-.30 ***	-.26 ***
	女性	.32 ***	.31 ***	.27 ***	-.19 **	-.09	-.35 ***	-.33 ***

†p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

4 考察

本研究では、青年期の第二分離個体化と身体醜形懸念および大学適応感との関連に加え、日常生活におけるマスクの着用頻度による身体醜形懸念の差異を検証した。その結果、身体醜形懸念の高さは感染予防以外でのマスクの着用頻度と第二分離個体化の“ひとりで居られなさ”が高く、“不信感”“親への反発”“ひとりで居られなさ”が高いほど大学適応感が低いことが示され、仮説1は支持、仮説2・3は部分的支持であった。なお、第二分離個体化の“自惚れ”については仮説3とは反対に“居心地の良さの感覚”と“被信頼・受容感”が男女ともに低いから中程度の正の関連を示した。仮説1が支持されたことから、自らの身体イメージがネガティブで身体醜形懸念が高いほど、自分の容姿に対する不安から「よく見せたい」あるいは「見られたくない」と、マスクの着用頻度が高くなっていると考えられ、現代青年が抱く身体醜形懸念の見立てやアセスメントに寄与する知見と思われる。

第二分離個体化と身体醜形懸念では、性別にかかわらず“ひとりで居られなさ”と身体醜形懸念の全下位因子との間に正の関連がみられ、友人や親と一緒にいないことに恐怖感や寂しさを強く感じる状態では、自己の容姿に対する否定的な懸念や不安も高まりやすい可能性が示唆された。高橋⁶⁾は、本因子がDonald W. Winnicottの提唱した“一人でもいられる能力”を反映しており、小学6年生以降は中学、高校、大学と大きく変動することなく推移することを報告している。しかし、高橋が調査を行った1980年代半ばから約30年を経た2010年代半ばでは、携帯電話からスマートフォンやSNSなど青年期の友人関係をはじめとしたコミュニケーションの在り様は大きく変化している。本研究では“ひとりで居られなさ”因子が身体醜形懸念と正の関連にあることが示されたが、今後はその発達の変化や他の因子に比べて自己の身体的な受容とより強く関連する点を解明するための更なる研究が必要と思われる。また友人に対する“不信感”や“親への反発”が強いと、自己の容姿を気にして社会参加や外出などを回避しやすくなる傾向も示された。“親への反発”は、親からの自律および自立に向かいつつも親への依存状態や自身の未熟さを受け入れがたい状態や親からの分離個体化に伴う心理的葛藤の強さを反映してより強まると考えられる。したがって、自分の容姿への自信が低く社会参加や外出などが困難で“親への反発”が強い場合には、自身の態度や親に反発しつつも依存していることへの自己理解を深めるとともに周囲の理解を深めた関係が、結果として自分の容姿の受容にもつながっていく可能性があると考えられる。さらに男性では“自惚れ”が強いほど自らの容姿へのこだわりも強く、それに伴って社会的活動を回避しやすいことも示唆された。“自惚れ”の高い状態は分離個体化の不十分さとともに誇大的な自己愛傾向の高さも反映していると考えられ、表面的には自己の容姿に陶醉したり、高い自信を有しているように思われる。しかし、本研究結果からは、このような状態が容姿への自信を含めた自尊感情の低さの防衛である可能性が考えられ、男性は自己の容姿へのこだわりの強さとなって現れやすいことが推測される。これまで日本において分離個体化と身体醜形懸念との関連についての心理学的知見はほとんど検証されてこなかったが、本研究の知見から第二分離個体化が不十分な状態において身体醜形懸念が高まりやすく、臨床心理学的援助や教育実践において分離個体化の状態を見立て、個体化を促進することによって自己の容姿を含めた自己受容や教育の場も含む社会への参加を促進できる可能性が示唆されたと考えられる。

第二分離個体化と大学適応感の関連では、男女ともに“不信感”“親への反発”“ひとりで居られなさ”が強い状態であるほど学校生活での適応感が低いという仮説3が支持される結果であった一方、“自惚れ”は“居心地の良さの感覚”や“被信頼・受容感”と弱いから中程度の正の関連を示した。因子別にみると、“不信感”と“親への反発”が強い状態では適応感が全般的に低下しやすいため、第二分離個体化のプロセスにおいて特に留意する必要性が示唆されるとともに、これらは学校を含む社会生活への適応感だけでなく青年期の精神的健康を考える上でも重要な因子と思われる。また“ひとりで居られなさ”が強い状態では学校生活において打ち込む課題や目標を見出し難かったり、周囲からの拒絶感や疎外感を抱きやすい結果が示されたため、分離個体化の促進と併せて具体的に自身の目標や課題を明らかにするように働きかけることも有効と思われる。なお、“自惚れ”が“居心地の良さの感覚”や“被信頼・受容感”と正の関連を示した結果については、自己愛的で“自惚れ”が強い状態と自尊感情が高く健康的な自己愛の発達の状態とが十分に識別されずに測定された可能性が考えられる。青年期の分離個体化過程において一時的あるいは過渡的に自己愛が高まる状態になることが指摘されており¹¹⁾¹⁷⁾、本結果は健康的な自己愛の発達が環境への適応感を高める可能性が考えられる。しかし、日本人の場合には自己愛が本研究で測定した“自惚れ”のような誇大的かつ自己顕示的な形ではなく、過敏さや傷つきやすさとなって表れやすいとされている¹⁷⁾。そこで、本研究では第二分離個体化の視点に基づく自己愛が高い状態と適応感の関連を検証したが、今後は後者の自己愛の脆弱さと学校生活への適応や友人関係への適応状態との関連を検証する研究も有用と考えられる。

本研究の限界として、横断的研究のため第二分離個体化と他の諸要因との間の因果関係についてまでは論じられないことに加え、第二分離個体化尺度の因子構造の不安定性が挙げられる。本研究で用いたJASITAは海外で作成され

たSITAを高橋⁽⁵⁾が日本の社会文化的特徴を考慮して邦訳した尺度であるが、小学6年生から大学4年生までの対象を想定して項目を作成し、因子構造を抽出したため、対象の発達段階によって因子分析結果が異なっている⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽¹⁵⁾。本研究では、青年期における自己の発達に適切でないと判断した“共生欲求”を除外したことも影響してか、探索的因子分析で想定された6因子ではなく5因子構造が抽出され、因子内容も高橋と異なっていた。したがって、今後は高橋が作成したJASITAに関し、母性社会と言われる日本の社会文化的背景⁽¹⁸⁾や現代青年の心理的特徴なども考慮した項目内容の再検討も必要と考えられる。こうした課題を踏まえながら、現代青年の第二分離個体化過程の関連要因についての研究知見の蓄積が望まれる。

引用文献

- (1) Blos, P. (1962). *On adolescence*. New York: Free Press. 野沢栄司 (訳) (1971). 青年期の精神医学 誠信書房
- (2) Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The psychological birth of the human infant: Symbiosis and individuation*. New York: Basic Books. 高橋雅士・織田正美・浜畑 紀 (訳) (1981). 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化— 黎明書房
- (3) Masterson, J. F. (1979). *Treatment of borderline adolescent*. New York: John-Wiley & Sons. 成田善弘・笠原嘉 (訳) (1979). 青年期境界例の治療 金剛出版
- (4) Levine, J. B., Green, C. J., & Millon, T. (1986). The separation-individuation test of adolescence. *Journal of Personality Assessment*, 50, 123-137.
- (5) 高橋蔵人 (1989). 青年期における分離個体化に関する研究—質問紙調査による考察— 心理臨床学研究, 7, 4-14.
- (6) 井上忠典・佐々木雄二 (1992). 大学生における自我同一性と分離個体化の関連について 筑波大学心理学研究, 14, 159-169.
- (7) 伊藤良子・丸島令子 (2006). 青年期における親の養育態度と第二の分離個体化に関連する精神的健康について—分離個体化期の不安の検討を通して— 神戸親和女子大学大学院研究紀要, 2, 51-62.
- (8) 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- (9) 柏木恵子・永久ひさ子 (1999). 女性における子どもの価値—なぜ子を産むか— 教育心理学研究, 47, 170-179.
- (10) Littleton, H. L., Axsom, D., & Pury, C. L. S. (2005). Development of the body image concern inventory. *Behavior Research and Therapy*, 43, 229-241.
- (11) 横打泰子 (2014). 高校生における身体醜形懸念と自己不一致, 完全主義認知, 自尊感情の関連 日本心理学会第78回大会発表論文集, 395.
- (12) Lambrow, C., Veale, D., & Wilson, G. (2012). Appearance concerns comparisons among persons with and without aesthetic training. *Body Image*, 9, 86-92.
- (13) 大久保智生・青柳 肇 (2003). 大学生用適応感尺度の作成の試み—個人—環境の適合性の視点から— パーソナリティ研究, 12, 38-39.
- (14) Glenn, M., & Grayson, H. (1992). Separation-individuation, family functioning, and psychological adjustment in college students: A construct validity study of the separation-individuation test of adolescence. *Journal of Personality Assessment*, 59, 468-485.
- (15) 近藤孝司 (2010). S-HTPP法における第2の分離個体化の様相 中京大学心理学研究科心理学部紀要, 10, 21-35.
- (16) 田中勝則・有村達之・田山 淳 (2011). 日本語版Body Image Concern Inventoryの作成 心身医学, 51, 162-169.
- (17) 上地雄一郎・宮下一博 (編著) (2004). 荒れる青少年の心, 自己愛の障害 もろい青少年の心—発達臨床心理学的考察— 北大路書房
- (18) 河合隼雄 (1997). 母性社会日本の病理 講談社+α文庫

Relationships of second separation-individuation with body dysmorphic concern and sense of adjustment among adolescents.

Kaori NANKUMO* · Masakazu IWASAKI** · Toko IGARASHI***

ABSTRACT

This study examined the relationships of separation-individuation with body dysmorphic concern and sense of adjustment among adolescents. Three hundred seventy three university undergraduate and vocational college students (163 males, 210 females) responded to the three questionnaires. The results indicated that “incapacity to be alone” was positively correlated to body dysmorphic concern and “distrust” “rebound to the parent” and “incapacity to be alone” were negatively correlated to sense of adjustment. In addition, participants who often wore masks in non-infection prevention tended to have body dysmorphic concern.